

近江地方に現存する能の舞台の造形

横 山 勉*

A study of the formative elements of existing Noh stages in the Omi region

Tsutomu Yokoyama

In the Omi region which had the activity of the Sarugaku entertainments in the Muromachi period, Noh stages built by the prosperity of the Noh play at the present figure in the Nagahama Hachimangu, the Taga Shrine, the Himure Hachimangu and the Takeda Shrine after Meiji Era. Although the Noh stage of the shrine pavilions of the Omi region is small size as compared with the Samurai's Noh stage, it is full-scale modeling. Although the length of the Hashigakari is short fairly, the basic format of the Noh stage is followed.

1. はじめに

芸術性を高めた能の大成者である世阿弥が活躍した京都へ早くから進出した京都周辺の猿楽座の中に近江地方を活動拠点とする近江猿楽¹⁾の芸能座があり、その活躍が「申楽談義」²⁾ [永享2年(1430)]に散見される。近江猿楽を代表するものに上三座(山階座、下坂座、日吉座)、下三座(敏満寺座、大森座、酒人座)があった³⁾が、芸能は途絶えて伝承されていない。それら猿楽芸能座が活躍の拠点としたのは、現在の長浜市、彦根市、東近江市周辺で、そこに長浜八幡宮、多賀大社、日牟礼八幡宮、竹田神社があり、社殿に能の舞台がある。この能の舞台は近江猿楽芸能座と直接結び付くものではないが、現在の曳山祭り等が盛んな芸能的環境と、猿楽(能楽)を支援した地域性が重なってくる。近世において能楽が徳川幕府の式楽となると、近江地方では彦根藩の井伊家が庇護し、能楽隆盛の中心的役割を担った。現在、御殿の能舞台として現存する唯一の遺構が彦根城博物館の中庭に復元され、さらに多くの能面・能装束が伝えられている。今回は、能と深い関わりの歴史をもつ近江地方において、屋外に能の舞台をもつ長浜八幡宮、多賀大社、日牟礼八幡宮、竹田神社を対象に、社殿における能の舞台の実測調査を中心として、その造形概要を報告するものである。

2. 長浜八幡宮能の舞台

室町時代に近江猿楽の芸能座である山階座、下坂座の二座が主に長浜市域で活動していた。その

* 建設工学科建築学専攻

芸能座の活動地域のほぼ中央に長浜八幡宮はあり、そこには江戸時代を中心に能面36面、能装束2領が残されている⁴⁾。長浜八幡宮文書⁵⁾の永享7年(1435)に近江三座の勸進猿楽興行、永正2年(1505)に祭礼での山階猿楽春満の参勤記録がある。明治の新聞記事⁶⁾では、明治14年(1881)の朝日新聞に4月3、4両日、長浜神社で観世流シテ方片山等よる能狂言の催能、明治28年(1895)の扶桑新聞に地元の観世派西村善吾による奉納能

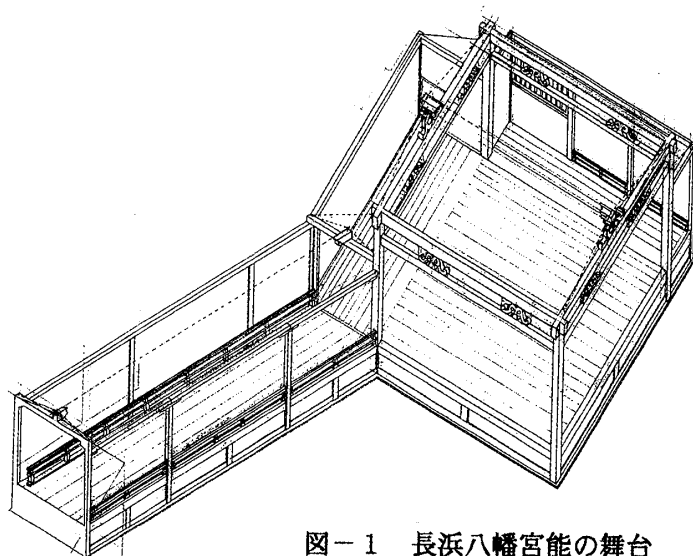


図-1 長浜八幡宮能の舞台

記録がある。長浜の芸能的環境を物語るものに、重要無形民俗文化財の長浜曳山祭の曳山行事⁷⁾〔昭和54年(1979)指定〕があり、それは秀吉時代の起源伝説とともに豪華絢爛な山車の造作による長浜町衆の力を示すものである。長浜八幡宮は長浜駅より東北東へ約1キロメートルの中心市街地にあり、東西に長い敷地に社殿はある。一の鳥居より東へのびる参道を矩折れに北へ進むと二の鳥居があり、拝殿、幣殿、本殿が一直線に並ぶ。社殿の南北軸の東側に、拝殿と対面して能の舞台はある。安永7年(1778)⁸⁾に能舞台が建立され、翌年に能の奉納があったとされる。明治29年(1896)の八幡神社境内之図⁹⁾の刷り物に横四間一尺五寸奥行四間一尺五寸の神楽殿が描かれており、舞台に付属する鏡の間、楽屋はない。これが増改築を経て現在の能の舞台へ整えられる。

現在の長浜八幡宮の舞台(図-1)は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造檜皮葺で、幅4.0尺の下屋の脇座が設けられている。脇座は高欄が回されているが、南面三分の一は武者窓付き漆喰壁である。舞台妻飾りとして木連格子、六葉釘隠し付き蕪懸魚があり、破風に飾り金物はない。内部妻面と前背面はともに彫り込みのある板葺股で化粧棟木を受けている。柱間の2本の水平材の間に彫り込みのある装飾的な透かし葺股が2つつつ四方にある。四隅の7寸柱は几帳面取で、類例は少ないが西本願寺奥能舞台¹⁰⁾、表能舞台¹¹⁾などがある。舞台の床板は江戸城表書院能舞台¹²⁾の規範と同じ向きに貼られているが、床下に瓶は据えられていない。9.6尺高大画面の鏡板に老松、脇鏡板に若竹の規範の能画が描かれている。本舞台と後座は化粧屋根裏天井で、傾斜13度の舟底と傾斜22度の片流で構成され、本舞台の天井勾配は浅く、道成寺の演能ために天井高を確保するのは難しい。本舞台と角度63度の三間の橋掛りは西本願寺奥能舞台の60度より僅かに浅く、十畳の鏡の間へと繋がっている。三間の橋掛りは両側に高欄が付き、背面に漆喰壁がある。屋根は一軒、一部銅板瓦葺の切妻造である。本格的な能の舞台の造形であるが、葺股の曲線美とともに内部天井の勾配が浅いことで優美な舞台空間となっている。

3. 多賀大社能の舞台

東の鈴鹿山系と琵琶湖へ西流する芹川と犬上川に境をなす多賀町にあり、「古事記」〔和銅5年

(712)] 撰上、古くから多賀信仰が広がっていた多賀大社は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家、井伊家に尊崇・庇護され、昭和の大造営¹³⁾を経て現在の社殿の結構が整えられた。多賀大社は能と関わる深い神社であり、「申楽談儀」に近江猿楽発祥の地と伝えられる下三座の敏満寺座が散見され、その位置は多賀大社の近郊である。さらに多賀大社には能面 59 面、狂言面 13 面が残され¹⁴⁾、その多くは室町時代の古面も含むが江戸時代のものである。その中から正月の翁始め

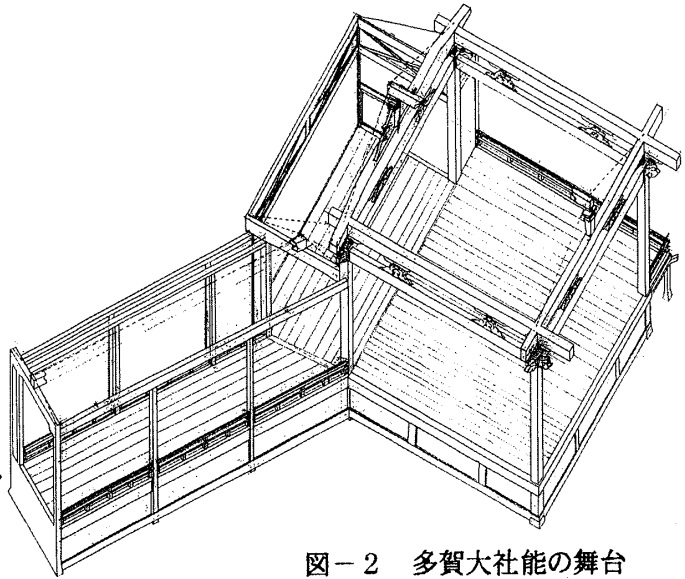


図-2 多賀大社能の舞台

神事に「白式尉面」「黒式尉面」が用いられる。「多賀大社文書」¹⁵⁾の応仁元年(1467)に例年祭礼参勤の北坂大夫、山階大夫、日吉大夫の禄米、天文 19 年(1550)に多賀地方の素人猿楽集による神事猿楽の代役記録があり、多賀周辺の猿楽芸能座の活躍がわかる。明治の新聞記事¹⁶⁾では、明治 19 年(1886)の日出新聞に能の舞台再建前の催能と祭典の盛況記録がある。明治 39 年(1906)の京都日出新聞に京都の観世流シテ方片山九郎三郎、大江又三郎、金剛流シテ方金剛勤之助等、狂言茂山家等、能役者による 18、19、20 日の 3 日間の盛大な舞台開きの祝能の開催、明治 40 年(1907)の京都日出新聞に維新以来中断の神能を再興と 3 日の式能開催記録がある。以後、多賀大社の翁始めは毎年 1 月 3 日に「翁」狂言「福の神」が奉納され、大蔵流狂言方の茂山社中、観世流シテ方の片山社中が参勤することになる。彦根藩の狂言師であった茂山家は多賀大社を尊崇し、二世茂山千作は洛中百社奉額(昭和 11 年~19 年)¹⁷⁾の百社目を多賀大社で狂言奉納するほど、関係を大事にした。現在の能の舞台は、拝殿、本殿と一直線に並ぶ社殿軸と矩折れに正面を西向きとして、拡がりのある観能空間に包まれて行んでいる。

舞台(図-2)は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造銅板葺で、飾り金物付き高欄のある 3,5 尺幅の脇座が張り出している。妻飾りは木連格子と猪の目懸魚が施され、二軒で屋根の軒が深く、風格のある形姿を創出している。内部妻面は笈形付大瓶束で両側の掘込み彫刻によって華麗さを創出し、それと対照的に前背面は間斗束で化粧棟木を受けた控え目な造形となっている。掘込み彫刻の透かし墓股が一間にふたつ水引梁上に施され、二軒、四隅の三ッ斗の柱頭組物をもつ 8,3 寸柱など、全体として重厚な本格的能舞台の表現となっている。舞台の床板は江戸城表書院能舞台の規範と同じ向きに貼られている。本舞台と後座は化粧屋根裏天井で、傾斜 21 度の舟底と傾斜 20 度の片流で構成されている。6,5 尺高の 6 枚組嵌め込み鏡板戸による鏡板に定型の老松が描かれていたが、近年、新たに鏡板と脇鏡板が造作され、元の能画が再現された。鏡板上に斜材による欄間様の装飾が施されている。嵌め込み鏡板戸と欄間による背景は座敷能の舞台を彷彿とさせる。西本願寺奥能舞台より深い 57 度の本舞台との角度(西本願寺奥能舞台は 60 度)をもつ橋掛りは八畳程の鏡の間へ繋がっている。西本願寺表能舞台より広い 6,9 尺幅の橋掛りは三間あり、両側に高欄が付き、背後は漆喰の

壁面となっている。多賀神社造営誌〔昭和13年(1938)刊〕における舞殿の項の寸法表とほぼ一致し、武家の能舞台に匹敵する規模の本格的な舞台造形である。

4. 日牟礼八幡宮能の舞台

近江八幡市は琵琶湖南東岸にあり、日牟礼八幡宮は市街地の八幡山(鶴翼山)南麓、八幡堀の北側にある。日牟礼八幡宮周辺は平成3年(1991)選定の近江八幡市八幡重要伝統的建物群保存地区¹⁸⁾であり、豊臣秀次時代のまちづくりの歴史的風致を保っている。古来より皇室の尊崇厚く、足利、六角、徳川家等の武家の崇敬を受け、周辺住民の産土神として、近江商人の本拠地として関わり深い神社¹⁹⁾である。現在の社殿は北東方向の軸線に楼

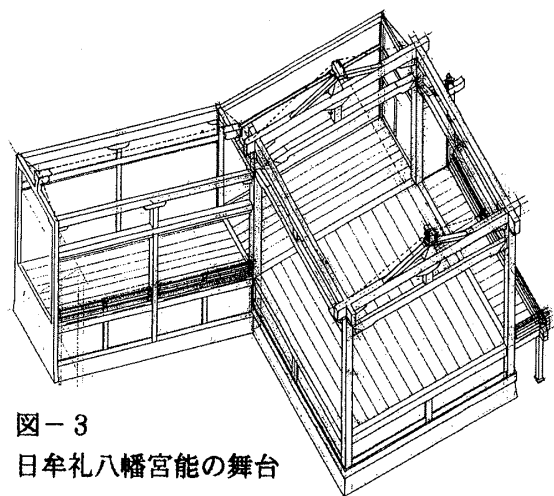


図-3
日牟礼八幡宮能の舞台

門、拝殿、本殿が並ぶ構成であり、楼門を潜ってすぐの右手に能の舞台があり、正面は北西向きである。能の舞台の棟札によって、明治32年(1899)に地元の大工高木藤吉²⁰⁾によって建立されたことが伝わる。日牟礼八幡宮のある湖東平野の中央部に今堀日吉神社(八日市市)、押立神社(湖東町)があり、前神社の延徳元年(1489)に今堀日吉神社の2月・6月の神事猿楽の祿、永正14年(1517)に今堀日吉神社の勧進猿楽、後神社の享祿2年(1529)に千部経会の法楽に猿楽奉納等猿楽興行の記録²¹⁾が残され、周辺地域における猿楽芸能の活動が伝わる。

舞台(図-3)は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造瓦葺で3,3尺幅の高欄付き脇座が張り出している。妻飾りは木連格子の前に猪の目懸魚が施されている。舞台は京間二間半四方で、武家の舞台と比べるとひとまわり小さく、橋掛りは二間と略式であるが、二軒で屋根の軒が深く、簡素で端正な造形である。2尺弱高の石積みの上に能舞台があるため、舞台床が低くならず、堂々とした形姿である。舞台床は無目敷居で本舞台、後座、脇座、橋掛りに区分されている。床板は脇座以外は江戸城表能舞台と同じ貼り方向である。舞台床下四隅に舞台中央へ向かって傾斜が付けられ、土に半分埋まった姿で素焼の瓶が音響効果のために備えられている。設置形式の類例として篠山市の春日神社能舞台があり、江戸城表書院能舞台では7個の瓶を所定の杭より銅線で釣り下げている。本舞台と後座は化粧屋根裏天井で、傾斜20度の舟底と緩やかな反りの付いた片流で構成されている。壁は板壁と漆喰で仕上げられ、内部妻面の豕扱首とともに簡素であるが、鏡板に定型の老松、脇鏡板に若竹、さらに貴人口にも竹が描かれ、唯一華やかさを表現している。能画は6尺5寸高で、その上を4,5寸幅の長押が回っている。本舞台と76度の角度で二間の橋掛りが付き、和室二間の楽屋(鏡の間)兼社務所へ繋がっている。橋掛りの手前には高欄が付き、背後は板壁である。

5. 竹田神社能の舞台

湖東平野の南の山林丘陵、田園風景が広がる鑄物師の集落の端、近江鉄道朝日野駅の北東の鎮守

の森に竹田神社はある。外部から見通せない程、木々に囲まれて社殿はある。古来皇室、武家の崇敬厚く、鍛冶、鋳物師、農耕の祖神として関わりの深い神社である。近江猿楽下三座の中の大森座は現八日市市、酒人座は現水口町に比定され²²⁾、いずれも竹田神社の10キロメートル以内にある。これら猿楽座は大和猿楽に吸収され、活躍の表舞台から姿を消すが、竹田神社にとって猿楽芸能の影響を享受した地域環境と考えられる。この能舞台は明治26年(1893)に豊臣秀吉奉納と伝える神能「竹田」にちなんで竹村猪八郎が寄進²³⁾したもので、東近江市指定文化財となっている。明治から大正にかけて盛んに演能されたが、現在は残念ながら能は行われていない。

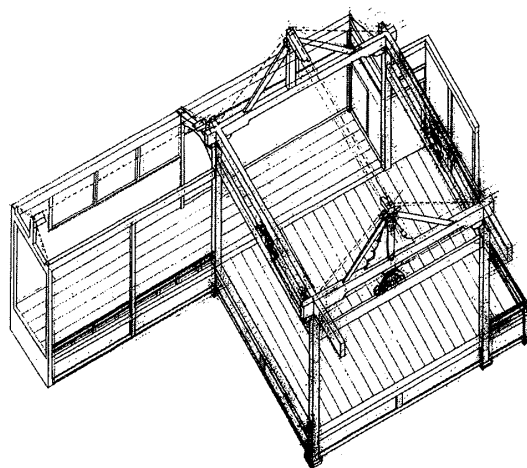


図-4 竹田神社能の舞台

竹田神社は南より拝殿、本殿と一直線に並び、本殿に向かって左手に拝殿と対面して能の舞台はある。南北軸と矩折れに能舞台がある場合は東側に位置することが多いが、竹田神社の西側にある能舞台は一般的配置と異なっている。本舞台の柱は直に礎石上にたてられ、舟肘木で虹梁を受けている。舞台正面は虹梁の上に大型の笈形付大瓶束、水引梁の上に透かし墓股が施された堂々とした妻飾りとなっている。透かし墓股は正面以外に北・南面にひとつずつある。内部は虹梁上の冢掬首で化粧棟木を受ける簡素な造形である。切妻造の能舞台の妻飾りは鏡板の能画とともに華やかさを表現できる数少ない見どころのひとつである。舞台(図-4)は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造瓦葺で4尺幅の脇座が張り出している。無目敷居で区切られた本舞台の床板は正面へ向かって貼られ、後座・橋掛りは長手方向となっている。後座の奥行は浅く、橋掛りの幅と同じになっている。後座、橋掛りに平行して下屋が付き、そこは武者走りとなっていて鏡の間と後座、本舞台とを繋いでいる。橋掛りと武者走りの上部は開け放たれ、御簾が付けられている。本舞台北西隅は溜りの空間で直接外部と繋がっている。飾り金具のない控え目な高欄が手前のみ施された化粧屋根裏天井の橋掛りは本舞台と直角に付き、長さは二間と短く略式となっている。棹縁天井の鏡の間は三疊程度と狭い空間である。本舞台と後座は化粧屋根裏天井で、傾斜28度の舟底と傾斜22度の片流で構成されている。後座背面の鏡板に金泥をひいた定型の老松が描かれている。能画は6尺6寸高で、その上に羽目板が嵌め込まれている。脇画は若竹で、貴人口にも竹が描かれている。

6. 寸法にみる能の舞台の造形

式案の能舞台の完成期における江戸城本丸表能舞台〔万延元年(1860)〕の規範との比較より近江地方における社殿の能の舞台(図-5~7、表-1)の造形をみると、長浜八幡宮に関して、能の舞台の間口と奥行は僅かに小さく、その舞台はほぼ正方形である。後座の奥行は十分の七程度で、脇座の幅は僅かに大きい。橋掛り長は二分の一程度であり、幅は僅かに小さく西本願寺奥能舞台とほぼ同じである。舞台正面開口の縦横比は1.98で、江戸城本丸表能舞台の1.77と比して横長開口

となっている。多賀大社に関して、能の舞台の間口と奥行はほぼ同じで、その舞台は正方形である。後座の奥行はほぼ同じで、脇座の幅もほぼ同じである。橋掛り長は二分の一程度であり、幅はほぼ同じである。舞台正面開口の縦横比は1,81で、江戸城本丸表能舞台とほぼ相似形の舞台開口である。橋掛り長を除いて、ほぼ同じ寸法の形姿であり、四隅の柱も太く、本格的な能の舞台造形となっている。日牟礼八幡宮に関して、能の舞台の間口と奥行は十分の八程度のひとまわり小さく、正方形の舞台であり、文禄2年(1593)豊臣秀吉による禁中催能の舞台²⁴⁾とほぼ同じである。後座の奥行は十分の七程度、脇座の幅はほぼ同じである。橋掛り長は三分の一程度であり、幅は僅かに小さい。舞台正面開口の縦横比では1,86で、江戸城本丸表能舞台とほぼ相似形の舞台開口である。全体的に小振りの造形で社殿の中で凜と佇んでいる。竹田神社に関して、能の舞台の間口と奥行はひとまわり小さく、舞台はほぼ正方形である。後座の奥行は十分の六程度で、脇座の幅は僅かに大きい。橋掛り長は三分の一程度で、その幅は僅かに小さい。舞台正面開口の縦横比では2,02で、江戸城本丸表能舞台の1,77と比して横長の舞台開口である。四隅の柱は太くはなく、橋掛りは短い構成であるが、田園風景の中にあって能の舞台の表構えは本格的な造形である。

7. まとめ

近江猿楽の芸能座が活躍した歴史をもつ近江地方の社殿における能の舞台は、三間四方規模の舞台形式と二間半四方規模の舞台形式が混在している。脇座の幅はほぼ同じであるが、後座の奥行は多賀神社以外、三分の二程度である。橋掛り幅はほぼ同じであるが、長さは江戸城表書院能舞台の二分の一、三分の一程度で随分と短い。橋掛りにおいて略式の傾向が窺える。今回調査した近江地方の能の舞台は武家の式楽としての舞台を超えるものはないが、全体的に簡素な形姿ながら本格的な舞台造形が認められ、いずれも能舞台の基本形式を踏襲していると考えられる。とりわけ多賀大社の舞台は橋掛り以外江戸城表書院能舞台の規模に近く、堂々とした造形である。社殿における能の舞台の配置は本殿・拝殿の軸線に対して矩折れに正面を向き、本殿に向かって右手にある構成が多いが、竹田神社の舞台は左手に位置する逆構成で、類例は多くはない。

謝辞 調査に際して、水本正寛氏(長浜八幡宮)、木村光伸氏(多賀大社)、中嶋知也氏(多賀大社)、三木治夫氏(多賀大社)、岳一隆氏(日牟礼八幡宮)、安井秀明氏(竹田神社)に多大なご協力を戴きました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 能勢朝次「能楽源流考」岩波書店 1938
- 2) 表章校註「申楽談儀」岩波書店 1960 pp.97~98
- 3) 後藤淑著「能楽の起源」木耳社 1975
- 4) 長浜市史編さん委員会「長浜市史第7巻」長浜市役所 2003
- 5) 鈴木正人「能楽史年表古代・中世編」東京堂出版 2007
- 6) 倉田喜弘「明治の能楽」日本芸術文化振興会 1996
- 7) 文化財保護課「滋賀県の民俗芸能」滋賀県教育委員会 1998
- 8) 中川泉三「近江長浜町志」臨川書店 1988
- 9) 笹原泉「長浜八幡神社考證」1900

- 10) 北尾春道「国宝能舞台」洪洋社 1942
- 11) 10) に同じ
- 12) 山崎榮堂「能舞台」『野上豊一郎編「能楽全書」第4巻』東京創元社 1979 pp.12~22
- 13) 多賀大社社務所「多賀大社由緒畧記」2006
- 14) 中村保雄「多賀大社の能面・狂言面」多賀大社社務所 1991
- 15) 5) に同じ
- 16) 6) に同じ
- 17) 茂山千作「狂言 85 年茂山千作」淡交社 1984 p.82
- 18) 文化庁「歴史的集落・町並の保存」第一法規 2000
- 19) 日牟礼八幡宮社務所「日牟礼八幡宮略史」
- 20) 奈良国立文化財研究所「滋賀県の近代和風建築」滋賀県教育委員会事務局 1994
- 21) 5) に同じ
- 22) 山路興造「翁の座」平凡社 1990
- 23) 蒲生町史編纂委員会「蒲生町史」蒲生町 2000
- 24) 12) に同じ p.32

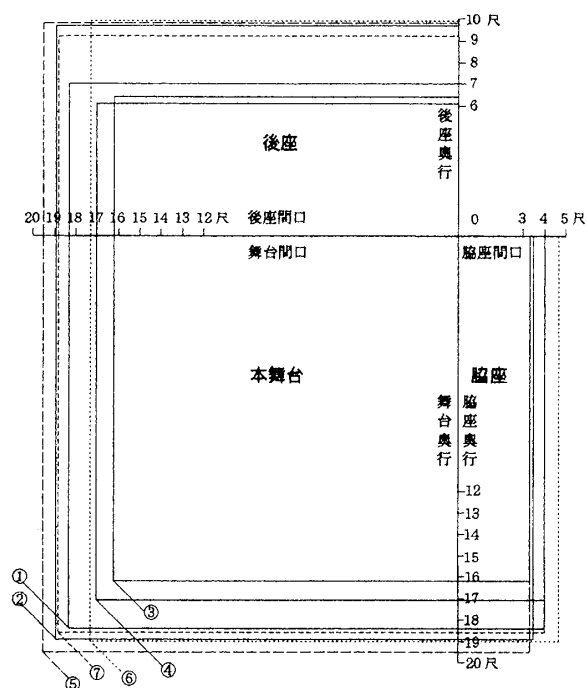


図-5 能の舞台開口と奥行

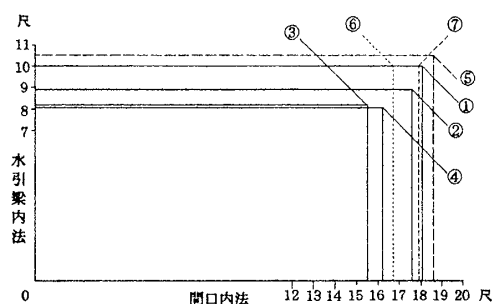


図-6 能の舞台開口内法と水引梁内法

- 能の舞台
- ①長浜八幡宮
 - ②多賀大社
 - ③日牟礼八幡宮
 - ④竹田神社
 - ⑤江戸城本丸表能舞台
 - ⑥西本願寺奥能舞台
 - ⑦西本願寺表能舞台

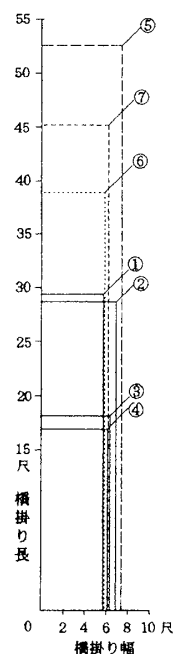
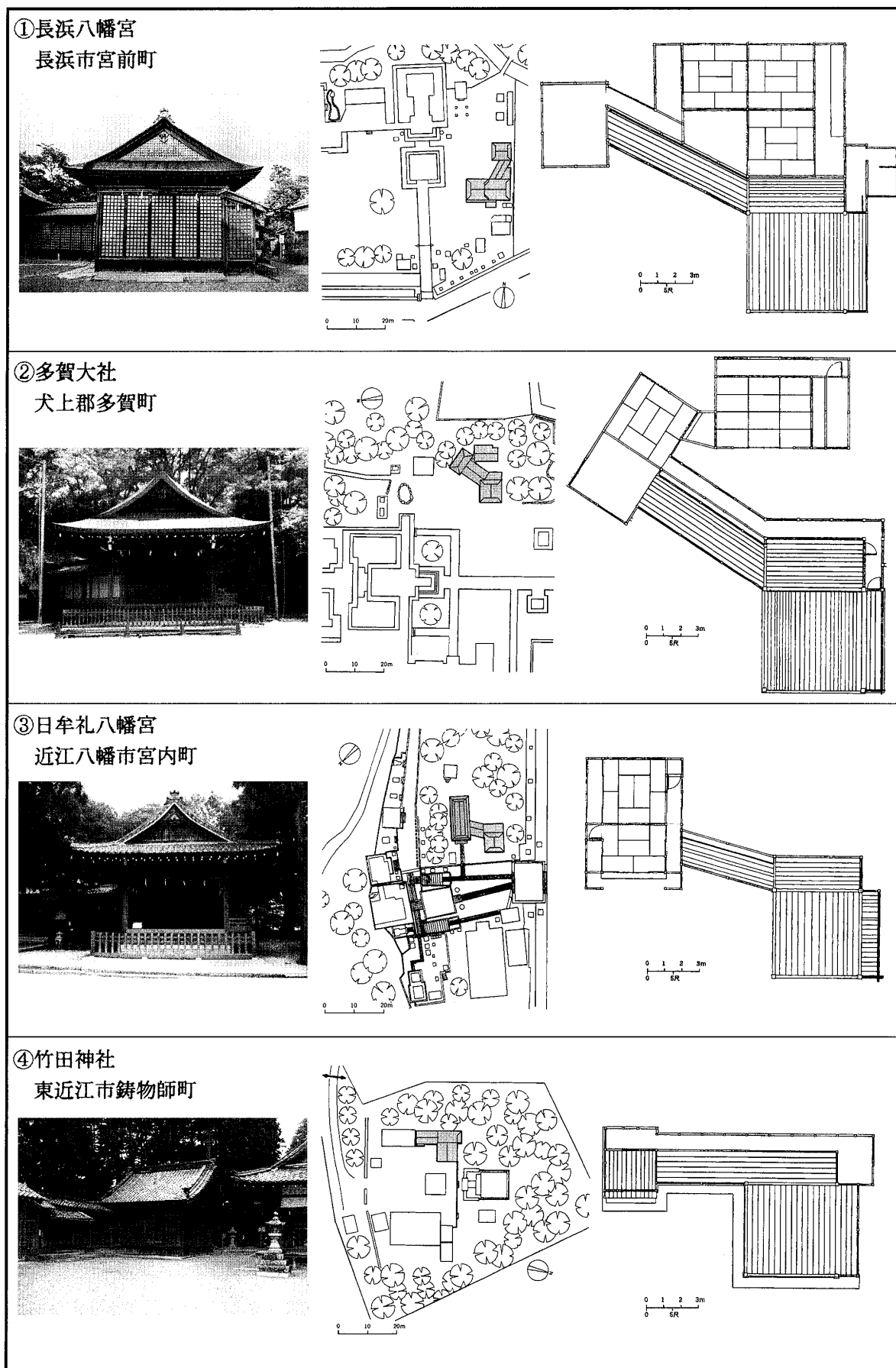


図-7 橋掛り全長と幅

表-1 能の舞台主要寸法 (単位: 尺)

	長浜八幡宮	多賀大社	日牟礼八幡宮	竹田神社
舞台開口	18,3	18,9	16,2	17,0
舞台奥行	18,4	18,9	16,2	17,1
後座奥行	7,0	9,7	6,4	6,1
脇座の幅	4,0	3,5	3,3	4,0
舞台床高	2,5	3,0	2,5	2,3
水引梁高	8,9	10,0	8,3	8,1
舞台柱太	0,70	0,83	0,73	0,62
橋掛り幅	5,7	6,9	6,3	6,1
橋掛り長	29,4	28,7	18,2	17,0



図－8 能の舞台配置・平面図

(平成20年3月31日受理)